令和６年度　研究の概要

Ｂ２グループ

㊫扇台中　小川寛陽　萩山中　鵜飼務　神沢中　山村卓司
助光中　小出紘大　千鳥丘中　髙柳　潤也　当知中　井上正徳

一人ひとりが考えることのできる場面の充実

１　研究のねらい

本年度Ｂ２グループでは、生徒一人ひとりが、自ら考え学びを深めていくことができるようにすることをねらいとして活動を行っていく。

ねらいを設定した背景として、『ナゴヤ学びのコンパス』がある。当文献では、「誰もが、互いの自由を認め合い、共に社会を創造していくことが、市民が思い描く未来社会」であり、それを実現することが公教育の目的であるとしている。（名古屋市教育委員会 2023，p.5）つまり、同じ物事に対して誰もが自由に考えることができ、それを表現することができる。同じ目標に向けた様々な視点を共有することで、より良い社会を醸成できるような人材の育成が求められているのである。この目的を基に『ナゴヤ学びのコンパス』では、「ゆるやかな協働性の中で自律して学び続ける」姿を、目指したい子どもの姿としている。（p.6）私たちが見ている生徒の中には、「どうせ『正解』があるから」と常に受け身であったり、「できない自分が考えたことはどうせ間違っている」と閉じこもったりすることが見受けられる。そこで、名古屋市が目指す子どもの姿を受け、生徒が自らの考え方を大切にし、考えることに魅力を感じられるようにしたいと考え、このねらいを設定した。

２　研究の内容

研究のねらいを達成するために，次のような手立てを考える。

手立て１　「ゆるやかな協働性」の成長に向けた工夫

学級で、学校で学びを進めることで共に学ぶ存在を身近に感じられることは、学習者が受け取れるメリットの一つである。他者との関わりの中で自分は成長していけるのだと生徒に実感させることで、共に学びを深めようとする姿勢を育みたい。そのために、一つの課題に対する複数の解法を経験する、説明しそれが受け入れられる、アドバイスをもらってもう一度考える等の活動に取り組ませることを考えていく。

手立て２　生徒が自律して探求できる支援の工夫

生徒の習熟程度に応じて、例えば、穴埋め形式や、概要のまとめ、あるいは説明文の完成のいずれに取り組むのが、学習目標の達成に向けてより適しているのかは変わってくる。そこで、生徒が自分に合った課題を選べるように複数の難易度（基本・標準・発展等）の問題を準備したり、答え方の形式を選択できたりする準備を考える。なお、生徒にとって自分に合った課題や解答形式を選ぶことは不慣れなものであるため、選ぶことへの支援は別に必要である。

【参考文献】

名古屋市教育委員会（2023）『ナゴヤ学びのコンパス』